

# 藝える

藝える 第14号

ふむ、  
子育て…  
どうする？

芸術と子育て

東京藝術大学

東京藝術大学広報誌「藝える」第14号

発行日  
2024年3月21日

編集・発行  
東京藝術大学「藝える」編集部

編集長  
藤崎圭一郎

アートディレクション  
有山達也

デザイン  
大野真琴(アリアマデザインストア)

写真  
富田里美(表紙 P1-6, 13-14, 17, 20-26)  
ヴィータネン恵美(P9-11)

校閲  
西村 knack 雅彦

編集  
小林沙友里

事務局  
東京藝術大学企画総務課

印刷  
シナノパブリッシングプレス

# 藝える



「藝える」は「うえる」と読みます。今号の特集は「子育て」です。

多くの人にとって子育てのタイミングはキャリアアップの大切な時期に重なります。芸術に関わる仕事をする人たちは、どうやってそれを両立させているのでしょうか？ 芸術家支援制度の多くが人材育成を目的に30代以下を対象にしているため、キャリアアップに焦って、子どもをもつことに迷いが生じたり、アーティストを招聘するといいつつも、子ども同伴ということは全く前提とされていなかったり……社会はまだまだ子育てにやさしくありません。それでも、やってみたらなんとかなって、気づけば子どもが自分たちを成長させてくれ、創作活動にもプラスの影響を与えてくれる。藝大卒業生のそんな7つのケースを取材しました。

藤崎圭一郎 / 美術学部デザイン科教授・本誌編集長

## 特集

### 目次

01

卒業生の  
アーティストの皆さん  
子育て、  
どうしてますか？

04

CASE 1

渡辺志桜里

生活と活動がどどんひと続きに。  
アーティストであるパートナーと  
子育てを面白いがる現代美術家

12

CASE 3

持田敦子

育児休業は選択肢になかった。  
大変だけど、私は私。長野を拠点に  
大作を手がけるアーティスト

08

CASE 2

松崎泰子

家族のおかげで今の自分がある。  
フィンランド国立オペラ劇場で  
活躍するファゴット奏者

22

CASE 6

黒岩航紀 伊藤優里

山梨を拠点に家族と暮らし  
自分たちらしい音楽を探求する  
ピアニスト&フルーティスト

16

CASE 4

筒井龍平

在学中に結婚し、会社を設立。  
4人の子どもたちに背中を見せる  
気鋭の映画プロデューサー

19

CASE 5

李旻河

妊娠・出産・育児での経験を経て  
パフォーマンス作品を制作。  
藝大→韓国で活動中のアーティスト

25

CASE 7

齋藤繁一

産むこと以外はなんとかなる。  
神楽坂～茅ヶ崎を1日2往復！  
バレリーナと「遠距離婚」の建築家

28

授業SANKAN

熱いうちに打て! 編

美術学部工芸科鍛金専攻  
+  
音楽学部器楽科管打楽専攻打楽器

34

お知らせ

卒業生の

アーティストの皆さん

子育て、

どうしてますか？





作品制作や演奏、研究といった活動に励んでいきたいけれど、子育てと両立していくのはむずかしそう。時折、そんな不安を抱く藝大生の声が聞こえてきます。そこで、子育てしながら活躍する7組のOB・OGに話を聞きました。多様なロールモデルの体験談を参考に、あなたなりの生き方を考えてみませんか。



渡辺志桜里さんの制作の拠点は葛飾区にある。その家屋を改造したスタジオに、彼女はパートナーの卯城竜太さんとともに1歳になったばかりの子、ノラちゃんを連れて、抱っこ紐姿で現れた。

藝大大学院美術研究科修士生の渡辺さんは、循環をテーマにした大掛かりなインスタレーションを制作する作家として活動し、特に最近はさまざまな場所で発表する機会も増えている。

卯城さんもまた、Chim + Pom from Snappa Groupのメンバーとして国内外のプロジェクトに携わり、展覧会のキュレーションなども手がけるアーティストだ。

人がよく集まるというスタジオは、水が流れるいくつものタンクの中に生き物が育ち、なにやら妖しい実験室のよう。渡辺さんに植物や魚の名前を教えてもらいながら案内してもらったあと、「お腹が空く時間になっちゃいましたね」と、車で15分ほどの場所にある自宅へお邪魔することになった。

## 生活と活動がどんどんひと続きに。 アーティストであるパートナーと 子育てを面白がる現代美術家 渡辺志桜里

「実はいま、ここにはもうひとりアーティストが居候しているんです。時々保育園の迎えを手伝ってくれることもあって」と話しながら、ノラちゃんにごは

んを食べさせる卯城さん。日々どのように仕事と子育てをしているのか尋ねると、「ノラが朝7時くらいに起きるので、朝食を食べさせて、8時半に保育園へ。そのあとはスタジオ

オで制作したり、外で仕事をしたり。卯城さんが18時に保育園へ迎えに行くので、私は20時くらいまで作業をしていることも多いです」と、渡辺さんが教えてくれる。平日はもちろん、土曜日も保育園を利用しているのだそう。

「保育園から帰宅したらノラに夕飯をつくって、お風呂に入れるのはだいたい20時半〜21

時くらい。毎日、志桜里さんと交代で入れていて、どちらかがノラを受け取って服を着させてミルクを飲ませて……できる限り一緒にやっています」と卯城さんが言い、志桜里さん〴〵卯城さん〴〵と互いを呼ぶ2人の会話を聞いていると、3人家族の普段の生活が少し想像できてきた。

「普段、めっちゃ話し合うよね(渡辺さん)」「何しろ未経験の育児だから、基本ずっと相談し合ってるよね(卯城さん)」

もともとなんでも話せる2人だったが、ノラちゃんが生まれてこの1年で、自然とフォローし合い、役割分担をしながら子育てのペースがつかめるようになってきた。保育園に預けているとノラちゃんがしょっちゅう風邪を引き、急遽迎えに行かなければならないなど予定通りに事が進まずてんでこ舞いになることもあるが、周りに助けられながらどうにか回っているという。しかし妊娠がわかった2022年当時、渡辺さんは作家として駆け出したばかり。不安なことも多かったと振り返る。

「キャリアがストップするなと思いました。

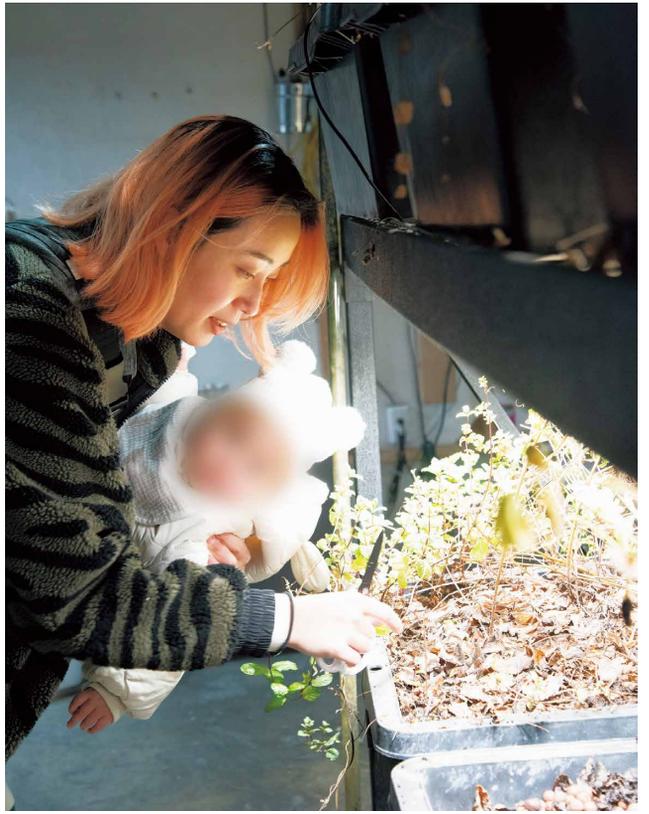


### 渡辺志桜里

わたなべ・しおり / 1984年生まれ。  
東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。  
同大学院美術研究科彫刻専攻修了。  
植物や魚を使ってエコシステムを  
探究するインスタレーション作品  
《サンルーム》は代表作。国内外  
の展覧会に参加するなど活躍の場  
を広げる。写真は、葛飾区に位置  
する渡辺さんのスタジオにて。

### 卯城竜太

うしろ・りゅうた / 1977年生ま  
れ。2005年に結成されたアーティ  
ストコレクティブ Chim ↑ Pom from  
Smappa! Group のメンバー。美学  
校での講師や WHITEHOUSE (新  
宿) でのキュレーションなども手  
がける。近著に『活動芸術論』(イ  
ースト・プレス)。



スタジオでノラちゃんを抱えながら手入れしている植物は、生物が入ったタンクを管でつなぎ水を循環させる作品《エコシステム》に使用。

でも、『子どもがいることがプラスになると  
思っ生きていきたい』と、すごく思ったこ  
と覚えています」

卯城さんはそんな彼女の様子を見て、子ど  
もができたことで渡辺さんが制作をできなく  
なったらそんな世の中おかしい、と強く感じ  
たそう。だから当然、育児は2人でやる。  
出産に向けて2人で準備を進めるなかで、  
初めて知ることもたくさんあった。

ものの、特に首都圏の産院などでは出産費用  
が60〜80万円になることも多く、自己負担額  
は少なくないのだ。

出産後は1カ月間、卯城さんの母親が泊ま  
り込みで手伝いにくってくれた。「上げ膳据え  
膳で、いま思えばあの期間がいちばん楽だっ  
たな」と渡辺さんが微笑む(ちなみに、ノラ  
ちゃんが生まれてから、2人とも以前より親  
とのコミュニケーションが取りやすくなった

「いちばん驚いたのは、  
『出産ってこんなにお  
金がかかるの?』という  
ことでした。保険適用  
外だなんて知らなかつ  
たから」という渡辺さ

んの言葉に、「少子化  
問題がこれほど取り沙  
汰されているのにおか  
しいですよ」と、卯  
城さんが続けた。現状

では、被保険者であれ  
ば出産育児一時金とし  
て50万円の給付がある

とのこと)。保育園に入園できるのは生後3  
カ月だったため、それまでの間は渡辺さんは  
無理のない範囲で仕事をし、卯城さんは「自  
主的な育児」を取り、東京都が設けるベビー  
シッター制度も最大限に活用した。

もともとピンとくるものもなく「結婚が面  
倒だった」という渡辺さん。「LGBTQ+  
の人たちが平等に結婚できないなら、そんな  
特権は要らない」という卯城さんの考えに賛  
同し、事実婚を選んだ。

少し悩んだのはノラちゃんの苗字をどちら  
にするか。事実婚の場合、子の籍は自動的に  
出産した母の戸籍に入るため、家庭裁判所で  
「子の氏の変更許可の申立」の手続きを行っ  
て変更した。そんなふうにして、これまで知  
らなかった世の中の仕組みをもつて体験  
することになり、「それが面白かったよね」  
と声をそろえた。

そして現在。保育園を利用しているとはい  
え、2人とも制作や展示のため地方に滞在す  
ることも多く、その際はノラちゃんも一緒に  
連れて行く。この1年だけでも直島、広島、  
札幌、山梨、佐渡島……とさまざまな土地を

訪れたそうで、「一蓮托生ですね」と渡辺さんが笑う。赤ちゃんを抱えながら会場で制作する大変さは想像を絶するが、渡辺さんと卵城さんの強みは、つくられることでもある。

「現場に着いたらまず初めに、子どもを入れて安全に遊ばせることができるベビーサークルをつくるんです。ブルーシートとか段ボールとか在り物でDIYして」と卵城さん。なるほど、なければつくってしまおうのがいちばん早い。渡辺さんがChimPom from Snappa Groupの制作を手伝うこともあり、

卵城さんいわく「志桜里さんはドリルとか工具を使い慣れてるから、ラッキー！とメンバーも喜んでます」。いっぽう渡辺さんは、「卵城さんは展示空間の構成を考えることやコンセプトと戦略を言語化するのがすごく得意なので、良き相談相手なんですよ」と、卵城さんは作品制作の良き先輩でもあるらしい。「最近では、美術館を含めアート界では育児に対してウェルカムになっていくと、ケアのテーマにも通じる話題が増えてきましたが、現実には体制としてまだ全然整っていないと感じる。だから、結局自分たちでやるしかない。

つくり手として、オムツもオモチャもぐちゃぐちゃに散らかった子育ての痕跡さえもインスタレーションとして見てもらおうようなものをつくろうって」(卵城さん)

「どの美術館にも必ず託児所があつて無料で利用できる。そんなことが当たり前になつたらいいなと考えるようになりました。例えば駅のエレベーターにしても、すごく不便な場所にあることが多いので、子どもを想定していないんだと街のデザインに目を向けるようになったんですよね」(渡辺さん)

そのように、子育てを通じて生活と活動が地続きになつていくことを実感している。

最後になつたが、妊娠中の22年に渡辺さんがキュレーションした、能の最古の演目「翁」を引用したプロジェクトがある。制作にあたり伊豆大島の三原山などでリサーチを重ねるなかで、火山活動と人間の身体がつながつていくようなアイデアを得たという。

「その時はお腹の中に赤ちゃんがいて、自分の身体が、向こう側の世界と結びついていくような体感を持っていたからこそ生まれた作品だと思ふんです」と、彼女にとって思い

入れの深い展覧会となつた。

そして渡辺さんはいま、「都会って空き地がないですよ。子どもが遊べるプレイパークをいつかつくってみたい」と夢を描く。「このアイデアもきつと、ノラがいるおかげですね」



2021年に新宿のWHITEHOUSEで開催された初の個展『べべ』の展示風景。皇居の濠から汲んだ水や、自ら採取した魚、ミジンコ、雑草などを使い、生態系を構築した。

フィンランド国立オペラ劇場。仕事帰りに気軽に公演に立ち寄る人も多く、子どもたちが社会科見学で訪れるなど、人々にとって親しみのある存在だ。この劇場でファゴット奏者として活躍する松崎泰子さんは、劇場が位置する首都ヘルシンキの隣街で、夫のミッコ・ペッカさんと長男（12歳）、長女（9歳）と暮らしている。夫もまた、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団に所属するファゴット奏者である。

「週に4、5回公演があつて、シフト制で演奏しています。11〜14時半が朝のリハーサルで、その後に昼の公演。夜の公演はだいたい19時にスタートします。公演のない日は19〜22時がリハーサルですね」と松崎さん。帰宅が遅くなることも多いため、夫婦でスケジュールを調整しながら交代で子どもたちの面倒をみているという（とはいえ、いまは2人とも小学生になり以前に比べたらだいぶ楽に！）。

オペラ劇場は公演の回数が多く、夜遅くまで活動することも頻繁なのが特徴だ。入団し

家族のおかげで今の自分がある。

フィンランド国立オペラ劇場で  
活躍するファゴット奏者

## 松崎泰子

て以来、松崎さんは17年ほどこのような生活を送っているのだそう。でも、どうしてフィンランドに住むことに？実はそれまでフィンランドを訪れたこともなく、藝大卒業後は長年の憧れだったドイツへ留学し、同地のオーケストラで演奏者になることが夢だった。

「ドイツで何度もオーディションを受けていたものの、最後の1人になかなか選ばれない日々が続いていました。そんなとき、ドイツ出身のファゴット奏者の友人が、『フィンランドのオペラ劇場が奏者を募集している』と教えてくれたんです。彼は演奏で日本を訪れることが多く、奥さんがフィンランド人ということもあつて、『フィンランドは日本と生活様式も似ているから日本人にとって住みやすい。ドイツよりいいか

もしれないよ』って」

なんとなくオーディションを受けてみようかな——そんな始まりだった。そして迎えたフィンランド国立オペラ劇場のオーディションでは、意外なことが。「審査員がコーヒートケーキを楽しみながら、『じゃ、どの曲から始める？』って言うんです（笑）。ドイツや日本だと、審査つてものすごく張り詰めた空気なんですけれど……」

その打ち解けた雰囲気のためもあったりラックスして演奏でき、見事合格。「やった！」とガッツポーズを決めた。2007年の雪が降る4月のことだった。

松崎さんはすぐにドイツからフィンランドへ渡る準備をはじめたが、少し不安がよぎったのは、「ドイツよりも寒いこと（笑）」と、苦手意識があつた英語のこと、それまであまり練習したことのない新たなオペラ曲の数々を修得しなければならないことだった。しかし彼女は、持ち前のポジティブな精神で突破していく。

いっぽう、フィンランドでの暮らしがスタートしてすぐ、仕事を通じてのちに結婚するこ



### 松崎泰子

まつざき やすこ

2000年に東京藝術大学音楽学部  
器楽科ファゴット専攻卒業。ドイツ  
国立ミュンヘン音楽・演劇大学  
卒業。2007年からフィンランド  
国立オペラ劇場のファゴット奏者。  
ヘルシンキの隣町ヴァンターにあ  
る自宅前に広がる森で、夫のミッ  
コ=ベッカ・スヴェアラさん、息子  
の海翔くん、娘の愛乃ちゃんを。



松崎泰子さん。フィンランド国立オペラ劇場で撮影。「特に管楽器奏者はオーケストラで演奏することが多く、オーケストラは以前は男性社会というイメージでしたが、最近は女性が増えてきていることを実感しますね」

とになるミッコIIペッカさんに出会った。「フィンランドの人々というのは結婚のハードルもあまり高くないけれど、離婚に対しても躊躇しない印象がある」とのことだが、彼女もまた自然と結婚に至ったのだそう。その1年後には長男の海翔くんを、さらに3年後には長女の愛乃ちゃんを出産した。だが冒頭で書いたように夜遅くまで続く公演が多い生

活のなか、自身のキャリアについてどのように考えていたのだろうか。

「オペラ劇場では、100人以上在籍する同僚の6割ほどが女性です。さらに、その多くが『お母さん』なんです。もちろん仕事と子育ての両立は大変だと思えますが、そもそもフィンランドではお給料と税金のシステムが共働きを前提として設定されていて、働きな

がら子育てをするのは普通のことだという認識を性別関係なくもっていると感じますね」  
現在フィンランドでは、フリーランスであっても産休は約1・5カ月、育児は子が2歳になるまでに約13カ月を2人の親が交代で均等に分け合える（うち63日は互いに譲ることが可能）。また1人親の場合は2人分を取得できる。そして育児休暇中は最初の56日間が給料の約90%、以降は約70%支払われるという（松崎さんが出産した当時とは少し異なる、2022年からの新制度）。

保育園を活用しながら、夜間の仕事が夫と重なったときはベビーシッターに来てもらった。加えて、体操のレッスンに通う海翔くんとバレエを習う愛乃ちゃんの送迎、週末には日本人学校にも……目が回るような忙しさだということとは容易に想像できるだろう。「まるでパズルのピースを組み合わせるように細かくスケジュールをやりくりしていましたね」と松崎さんは振り返る。

子どもが幼い頃は風邪を引くことも多くとにかく大変だったというが、子どもが1歳になるまでは有給で休むことが認められている

など、日本とは異なるフィンランドの「常識」に驚くことも多かった。

「それでも、急に休むと同僚に迷惑がかかったりするな……と申し訳なく思ってしまうこともしばしば。ところが同僚には、『皆が通る道で、そうやっていってるんだ』という意識がしつかりあって、私になるべく休まないようにしなきゃと考えることが『すごく日本人的だ』と言われました。休まなきゃだめ、休んで当然という考え方なんです。お金の助成制度が整っていることもすごくありがたいですが、子育てをする上でそういった人々の意識というものがとても助けになりますね」

現在、海翔くんは体操の強化選手として練習に忙しい毎日を送っている。もう、ひとりで練習場まで行き来できる頼もしい年齢になってきた。憧れの選手が日本人ということもあり、日本人学校での勉強にも熱が入っているのだそう。そして愛乃ちゃんはフィンランド国立オペラ劇場附属バレエ学校でレッスンに励む日々。

「実は私も子どもの頃にバレエを習っていたんですが、華やかな衣装にお化粧をして舞台

の上で踊ることがどうも苦手でした。そんな話を娘にしたら、『だからいま、お母さんはオーケストラピットで演奏しているんだね』って言ったんです。オペラ劇場では舞台下で演奏していますからね。私にとってはこの場所での演奏が心地よくて、自分の力も出しやすいということに気づいた。そんなことを考えたこともなかったけれど、娘に言われて、なるほど！って」

心のどこかに、「ドイツの大きなオーケストラに入りたかったな」というかつての夢がふとよぎることもあった。しかし、家族と過ごすなかで、いつの間にか変わっていた。

「私はオペラのオーケストラで演奏したいのか、シンフォニーオーケストラで演奏したいのか、特に希望があって仕事を選んだわけではなかったんですね。でも最終的にオペラ劇場で仕事することになって。先日、娘のオーディションがあって、今年の夏の公演に子役として出演することが決まりました。彼女が舞台の上で踊って、私は舞台の下で演奏。そんな「共演」ができたらいいいね、とよく一緒に話

していたので、新たな夢にひとつ近づきましたね」

藝大で学び、ドイツへの留学があったからこそ、家族と仕事に出会った現在がある。

最後はひとつ、松崎さんからの学生へのメッセージで締めくくりたい。

「アドバイスになるかわからないですが、学生として学んでいるときや就職してすぐの時期というのは、いちばん自分のために時間を使えるときだと思います、その時間をすごく大切にしていたきたいな、と。家族をもつて子どもがいても、現場で勉強できることはもちろんたくさんあります。でもそれは、あの頃にはがむしゃらに頑張った土台のようなものがあってこそだと思うんです」



バレリーナになることを目標に掲げる愛乃ちゃん（小学3年生）と、体操でフィンランド代表の期待がかかる海翔くん（小学6年生）。

既存の建築を使った大型インスタレーションを中心に制作活動を行っている持田敦子さん。祖母の家の縁側と室内の一部を円形にくり抜いて回転させた作品《T家の転回》(2017年)は、藝大サロン・ド・プランタン賞など複数の賞を受賞した。また、現在居を構える長野県飯田市で2年以上にわたって取り組んだ作品《解体》は、「つくるように壊し、壊すようにつくる」をコンセプトに、地元の解体業者とともに古い家を壊しながら、その過程で新たなかたちを提示し、解体と制作の価値を再定義した。

精力的に制作に励む一方で、夫のダニエル・クレマスさんとともに、4歳と1歳の2児を育てる。持田さんの1日は、幼子のいる多くの家庭と同様、めまぐるしい。6時台に起床。朝ご飯を食べさせ、保育園に送るとすでに9時過ぎ。自宅には戻らず、スタジオオカフエに直行して仕事をする。自宅で仕事をすることもあるが、朝の食べ残しが散乱した床の掃除を

育児休業は選択肢になかった。  
大変だけど、私は私。長野を拠点に  
大作を手がけるアーティスト

## 持田敦子

始めてからだとうまく集中できないため、家に帰らないほうが効率がいいのだという。

15時ごろ帰宅し少し家事をしたら、保育短時間認定を受けているため16時にはもうお迎えに行く。あとは料理、夕食、片付け、お風呂、寝かしつけ、明日の準備と怒涛のタスクが待っている。もつともこれは子どもの調子がい日の場合。幼い2人

は突然体調を崩すこともたびたびあり、すべてのタスクを投げ打って病院に駆け込むこともある。

「締め切りのあるものはなるべく前倒しで終わらせるようにしています。子どもが元気で、9〜16時の時間をもらえるだけでもありがたいという気持ちです」と持田さんは言う。

2019年、共通の知り合いを通じて日本

で知り合った、ドイツ出身のクレマスさんと結婚。クレマスさんの転職に合わせて、出身地である東京から飯田市に拠点を移した。子どもについては、クレマスさんは「ほしい」と希望していて、持田さんは「どっちでもいいかな」と思っていた。

「ただ、知らないことにチャレンジするのは好きなので、たとえてみれば『海外のアーティスト・イン・レジデンスに応募してみたら審査に通った』という感覚で、ある程度の期間は拘束されるけど、何か拾いものができたらいいなと思って出産しました。生まれるまではここまで子どもに手がかかるとは思っていなかったんです。『子どもを連れて海外に行って……』といった美術業界の武勇伝みたいなものがあるじゃないですか。そういう話を耳にしていたので、頑張れば両立できるかと思っていたんですが、全然できない」

夫婦での子育てや家事の分担は、夕食づくりと、保育園との連絡や事務手続きなど高い日本語能力が必要なところは持田さん、子どもたちの外遊びはクレマスさんがリードするが、基本的には「2人とも全力」。



持田敦子

もちだ・あつこ / 1989年東京都生まれ。2013年武蔵野美術大学日本画学科卒業。18年、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。また同年、ドイツのワイマール・パウハウス大学大学院 Public Art and New Artistic Strategies 修了。

「それぞれができる限りやって、できないところはお互いにカバーしています。だからすべてのことを共有しないといけない。子どもの保湿剤の塗り方から、洗濯の仕上がり具合といった細かいところまで話し合っています。子どもとの接し方についてもそうですね。たとえば以前彼が子どもに怒っていたとき、私はムチに対するアメのように優しく子どもをフォローしようとしたのですが、彼は『その怒りには正当性がある』ということを示すためにも甘やかすような態度をとらないでほしいと言っていました。逆に私が怒っているときは、彼は冷静に何が悪かったのか子どもに伝えようとしています。そういったことも話し合うので、めっちゃめっちゃコミュニケーションコストが高い」

育児に正解はないから話し合うしかない。クレマサさんは子ども好きなので、持田さんの話をよく聞き、自分の意見もよく話す。それでも夫婦2人で毎日がいっぱいいっぱいだという。

一定期間仕事を中断して、持田さんが子育てを中心に生活するという選択はなかったの

かを問うと、「それはないです」と即答。

「それでは私の精神がもたない。母親になりたい人生でもなかったし、作品をつくるのが好きで、いい仕事ができることが私にとっていちばん幸せなので。たとえば大作をついたり、展覧会で発表したりすることができなくても、リサーチやドローイングなど、その状況でできる限りのことをします」

その情熱を燃料に、出産後も遠方の芸術祭からの招聘を受け制作を続けてきた。

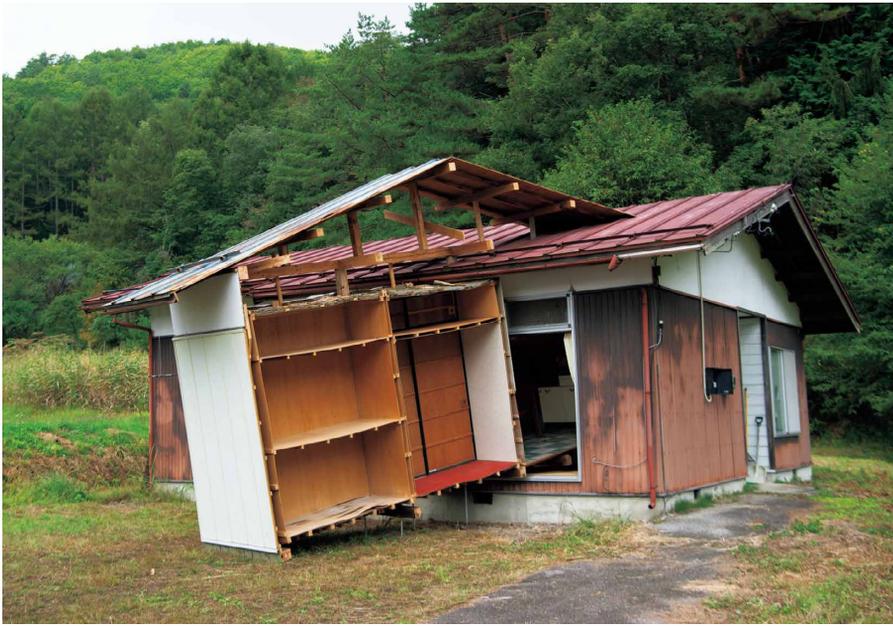
「滞在期間ができるかぎりミニマムにして、リモートでできることはリモートで行うようにしています。1、2泊であれば私が単身で行きますし、それ以上の場合は、夜間の授乳が必要だったころは、東京に住む母と子どもを連れて行き、日中は母にホテルで子どもを見てもらっていました。主催者から支給される旅費は私の分しかない場合が多く、母の分は自腹。赤字になることもあります。母は協力的ですし、ダニエルともコミュニケーションを密にとれる関係があるといった、いろいろとラッキーなことが重なったうえで、なんとかやれているという感じですね」



「格安で借りている」という、酒蔵をリノベーションしたカフェの一角に位置するスタジオは、静かで制作に集中できる空間。《解体》の現場のほど近くにある。

子育てはこうしたさまざまな制限をもたらしたが、いい変化ももたらした。

「『大変、大変』と言いながらも、人生における日々の幸福度は爆増していると感じています。制作はいつもハッピーな気持ちで取り組んでいるわけではなく、むしろつらい時期のほうが長い。ハッピーなのは作品を好意的



『北アルプス国際芸術祭 2020-2021』で制作された《衝突（あるいは裂け目）》。一軒の家に別の家が突き刺さり、互いに干渉しあうことで新たな空間を生み出した作品。写真＝本郷毅史

に評価してもらったり、作品を通して世界と自分の回路がつながったように感じる一瞬だけ。そのためにズーンとした気持ちで過ごす、

みたいなことがほとんど。でもいまは、毎日

子どもたちが喜びをもたらしてくれています」

そう語ると、持田さんは頬を緩ませた。実際、公園を駆け回る子どもたちは愛らしく、疲れを吹き飛ばすエネルギーに満ちている。

制作にかける時間の使い方も、徐々に変わっていったという。

「子どものころに読んだスポーツ漫画の影響で、才能がなくてもがんばればうまくいくというドリムが刷り込まれていました。でも実際は寝る間を惜しんでがんばったら体を壊しますよね。それでも自分が漫画の主人公みたいにかんばれていないと自分を責めては落ち込む、ということに結構長く時間を費やしていました。いまは可処分時間自体は減っていますが、超忙しいので、『今日、私は限界までやれたのだろうか』と自問自答をする暇がなく、落ち込むこともなくなりました」

そんなさまざまな変化はあれど、作品のテーマにおいては、出産も育児も

「影響はない」と断言する。

「出産、育児は大きな経験ではあるので、それによって作品の方向性が変わる人ももちろんいると思いますが、私はあまりそういうことに影響されたくないという思いが以前からありました。子どもについてはあくまでプライベートな事象であって、テーマに反映することはありません。制作はこれまで続けてきたことをこれからも続けていきますし、制作に対する意欲や野心みたいなものも以前と変わりません。もちろん、子どものためにできる限りのことはするし責任をもつけれども、自分は自分。私は子どものために生きてるわけじゃない」

春からは、再びクレマスさんの仕事に伴い、長野県の大鹿村へと一家で転居する。飯田でのプロジェクト《解体》を手がけたときのよう、またゼロからコツコツと人脈を築き、新しい作品に取り組みつもりだ。

「すでにつくりたいものは頭の中にあります。そこできできないことができるはず」

どこにいても、どんなときでも自分の思いをかたちにするため制作を続けていく。

ロカルノ映画祭若手審査員・最優秀作品賞を受賞した映画『バンコクナイツ』（2017年）、マキタスポーツと池松壮亮が主演の『この世で俺／僕だけ』（2015年）などを手がけてきた映画プロデューサーの筒井龍平さんには、4人の子がいる。17歳の長女はカナダ留学中。次女は14歳。10歳の長男と7歳の三女はまだやんちゃ盛りだ。大学卒業後、IT企業に就職したが、「ビジネスから離れてもう一度勉強したい」と思い立ち、2005年、藝大の大学院映像研究科に1期生として入学。同年、高校時代から交際していた裕美さんと結婚。翌06年、在学中に長女が生まれ、そして会社を立ち上げた。「映像研究科1期生は世代も多様で、俺のほかにも在学中に子どもが生まれた学生が結構いましたね。いまの学生と比べて技術的には粗かったけど、できたばかりの科に飛び込む勢いとあふれ出す初期衝動があった」と、当時を振り返る。

設立した会社の売り上げの見込みはなく、

## 在学中に結婚し、会社を設立。 4人の子どもたちに背中を見せる 気鋭の映画プロデューサー

### 筒井龍平

筒井さんはゲーム会社に勤務していた裕美さんの扶養家族となった（裕美さんは第3子妊娠を機に退職）。

「それまでいわゆるITベンチャー第1世代で、我ながら調子に乗っていて、『自由』を糸が切れた風のようにフラフラ遊び回ることでと解釈していました。子どもが生まれて初めて自由と責任は表裏一体だと腹落ちした」

子育てについては、裕美さんに「頭が上がりません」と感謝する。

「在学中は働いていたときよりも自由になる時間はあったので、風呂に入れたり、オムツを替えたり、保育園に送り届けたりしていました。でも撮影が始まれば負担はすべて妻に任せていたので、どれくらい子育ての力に任せていたかはわかりません。いま振り返って

みても、当時どうやってやりくりしてたのか思い出せないくらい大変でしたね。夫婦2人ともどうにもならないときは、どちらかの両親に来てもらい、ママ友や保育園、ありとあらゆる手立てを講じて日々戦っていました」

子どもの成長とともに乳幼児期のような手間は減っていくが、反抗期、思春期と新たな悩みが出てくる。

「子育てはやっぱままならないですよ。自分が仕事で余裕がないときは感情的にしかってしてしまうことも。それで『子どもに当たってしまった』と自分の未熟さを思い知らされます。『育児は育児』とよく言いますが、こういうことなんだなとよくわかる。でも、ギリギリとしながらどうにか乗り越えていくそのプロセス自体がかけがえのないことだし、まさに目に入れても痛くない存在がいることはとても幸せ。願わくば、ああでもないこうでもないやっているといる親の姿を見ながら、子どもも何か感じてくれたらいいなと思います」

子育てを通して、社会が子どもとその親に優しく、ことも身をもって感じた。保育園になかなか入れない。電車で子連れで乗



カナダ留学中の長女・夏凜  
(かりん) ちゃん。



筒井龍平

ついつい・りょうへい / 1977年東京都生まれ。2000年慶應義塾大学総合政策学部卒業。05年東京藝術大学大学院映像研究科入学。06年トリクスタ設立。07年同大学院卒業。写真は北鎌倉の自邸で、次女・璃莉花(りりか)ちゃん、長男・遥海(はるみ)くん、三女・かなちゃん、妻の裕美さんと。ご本人は遥海くんとバスケットをして足を負傷中。



『バンコクナイト』は日本・フランス・タイ・ラオス合作。まとめるのには苦労したが「ぶつかり合いから面白いものが生まれた」と語る。

ると居心地の悪い空気を感じる。公園には規則が多く自由に遊ぶこともままならない。

「子どもは突然泣き騒いだり、突然どこかに走っていつちやったり、アンコントローラブルな存在。そうしたものを受け入れたくない、排除すればいいという、日本社会のリスク許容度の低さが、通奏低音のようにあると感じました。それが巡り巡って自分で自分の首を絞めていることに気づかない。子どもが自分たちの「未来」を担っているという感覚が薄

いんですよね。俺も子育てすることで初めてそうしたことが体感としてわかった。だからわかってもらうことは難しいとは思いますが」  
こうした経験は、筒井さんの仕事にも新たな視点を与えた。

「子どもが伸び伸び育つことができる社会は、子どもだけでなく大人も含めてあらゆる人にとって幸せな社会だと思う。すなわち子どもに価値基準を合わせることは、社会に向き合うスタンスやさまざまな制度設計を考える意味でも大切。その視点が、映画においてもカメラで何を捉えるか、それをどう編集するかに関わったように思います。子ども向けの映画を撮っているわけではないので、意識しているわけではありませんが、知らず知らずになんかそういう眼差しが実装されてきた」

映画プロデューサーの仕事は、子育て同様アンコントローラブルでリスクを取る仕事でもある。多額の資金と人を集めて生まれたかけがえのない作品が当たるかどうかはわからない。それでも手元から巢立ち、多くの人に見てもらえるよう懸命に育てていく。  
「やっぱり映画をつくることは面白い。大げさ

かもしれないけれど、これまでにない価値観や世の中に対する見方を提示できるエキサイティングなものでもある。好きなことと生活を成り立たせることは簡単ではないし、パンデミックに直撃されて苦しい状況にもなった。それでも守りに入らず突っ張って、映画と心中しようと腹をくぐりました。必死でやれば必ず道が開けるとは限らないけど、必死でやらなければ道は開けない。映画にとことんぶつかっている親父の背中を、子どもたちに見てもらいたい」

常に攻めの姿勢だ。今後は海外移住も視野に入れながら、国際共同製作に積極的に乗り出す。国外に目を向けたのは、コロナ禍で裕美さんが「この状況を打開するには場所を変えたほうがいい」と助言したことがきっかけ。筒井さんは「裕美と結婚したことが俺の人生最大の手柄」と感謝しきり。

「家族についても子どもについても、えらそうなことは言えないですけど、ぶつかり合うなかに、かけがえのない瞬間がある。一度も失敗せず、いいことばかりすくい取っていくことはできない。浮き沈みのあわいにこそ、心を打つ表現があるのではないかと思っています」

ひとりの妊婦が、白い台の上に運ばれる。国籍も性別も、また性的指向も異なる人々が彼女を囲み、腹部に筆で呪術的な紋様を描き込んでいく。胎動のようなリズム。繰り返される筆の動き。そして――。

2021年に発表された現代美術家・李旻河さんの《Passages》は、生命と生殖の神秘をモチーフにしたマジカルな映像作品である。作品中に登場する妊婦は作者自身。撮影は19年、李さんが妊娠8カ月のときに行われた。「妊娠中のパフォーマンスを起用して作品をつくるのは大変なので、じやもう自分が妊娠しているうちにつくろう！」と。予算が限られているので、撮影は1日で、14時間かけて。不思議だったのは、スタッフも含めて多くの人から『旦那さんは許可したんですか?』と言われたことですね。子どもの権利は男性にもあるから、妊娠している妻の体は男性のものでもある、それは、西洋でも東洋でも昔からあった考えなのだと」

史実への深いリサーチに基づく哲学的示唆

## 妊娠・出産・育児での経験を経て パフォーマンス作品を制作。 藝大→韓国で活動中のアーティスト 李旻河



映像作品《Passages》より。ゲイ、レズビアン、韓国に暮らす外国人のシングルファザーとともに新たな命の誕生を寿ぐ儀礼をパフォーマンスで表現した。

うしたテーマ設定に対しては、周囲から何度も奇異の眼差しを向けられたという。

「年上の男性の批評家からは『どうして君は歴史に興味をもつ?』とよく聞かれました。

光州や済州島（どちらも過去に軍隊による虐殺事件が発生）の出身ならともかく、ソウルで育った若い女性がなぜ?と。歴史的事件のような巨大なものを探究するのは男性の仕事と思われるていたんでしょね。女性は日常的なことに興味を感じ、自分と周囲を観察して作品づくりをするものなんだと」

なぜ自分は? それを掘り下げると、李さんに浮かんだのは幼い頃からの記憶だった。

「お小遣いをもらえるのはお兄ちゃんだけ、とか、多くの女性が経験しますよね。そうしたことが重なった先に、どうして社会はそんな構造なのか、なぜ差別や憎しみが生まれるのか……と関心が深まったんだと思います」

をほらんだ作風で知られる李さん。ソウル大学で東洋画を学び、07年に来日、藝大大学院の先端芸術表現専攻に入学したが、当時から関心は世界各地の歴史的な虐殺事件に向いていた。牛革製の世界地図に事件の場所と祈りの文字を刻印した《The Scorched World》(2019)に向き合うと、争いをやめられない人間の性を考えさせられる。しかし、こ

## 李旻河

い・みんは／韓国・ソウル生まれ。ソウル大学校美術大学東洋画科卒業。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了、13年同博士号取得。帰国後は個展、パブリックアートプロジェクトなどで精力的に作品を発表している。高麗大学校非常勤講師。恩師の最終講義のために訪れた藝大にて撮影。



大学に入った頃、韓国では日本以上にフェミニズムが力をもっていた。そんななか、性別で自分を決めたくないと感じひたすら作品制作に没頭した李さんにとって、家庭や子どもをもつことはまったく考えの外。が、偶然の出会いから結婚し、「出産ってどのくらい痛いんだろう？」と興味が湧いた」と李さん。40歳を目前に自然妊娠し、出産はコロナ禍の始まった20年1月。想像以上の身体ダメージに苦しめられながら生まれたての生命に向き合った日々は、自身のアイデンティティを大きく揺さぶる期間にもなった。

「理論的で論理的、哲学も好きな自分が『結局、ミルクをつくる牛なのか?』と(笑)。これまでである意味エリートとして生きてきた私は、世の中で起ることを第三者の立場から観察してきたんですよね。同じ女性が受けた差別や、その歴史についても。でもそれはどうしたって自分のものじゃないと限界を感じていたなかで出産して……結局、人間はただの動物で、私もそのひとりなんだなと」

出産を機に、制作スタイルは変化せざるを得なかった。アトリエで過ごすのは息子が保

育園にいる間のみ。表現形式も、集中して作業する映像やインスタレーションになった。

「もともと私の制作の大部分はリサーチなので、それは子どもと一緒にいる時間にもできなくはない。さあ撮影だ、展示だというときは、親や親戚、友人の手を借りて、制作は妊娠中からずっと続けてきました。年を重ねてからの妊娠、出産だったこともあり、起こりうる事態を予想して、いろいろと対策は立てていたのもよかったですね」

基本方針は「主婦にはならない」。家事は帰宅した夫とともにやる。家事時間を最少化するため、食事はテイクアウトに頼っている。「たぶん私、社会が求める母性愛からはものすごく遠い人間なんです。家事にも興味がないし、夫に文句を言われても『ごめんね』って(笑)。もちろん、子どもと家族のためならなんでもやりたい人もいて、アーティストの友人のなかには出産の5年後、10年後に復帰の個展をやる人もいます。ただ、戻れるのは10人のうち2人くらいというのが現実ですね」

予測して対策し、何より、諦めずに続けて

いくこと。「私が頑張ること、後輩にも『やれるよ!』と示したい」と李さんは言う。その思いは作品に、そしてアーティストとしてのあり方にも注がれていくのだろう。

「韓国政府は低い出生率を上げるため、アーティストの子育て支援にもすぐお金を使ったんです。でも、すべて失敗。現在の合計特殊出生率は、日本より低い0.72(23年)です。親の支援のためには、子どもから手を離せるサポートが、せめて1日何時間かでも受けられるように、市の文化財団や韓国文化芸術委員会に意見を出しています。そういうことをやっている、すぐ周囲から『国会議員になれ』と言われてしまうんですが(笑)。あと、疑問だと思うのは、国公立機関が運営するアーティスト・イン・レジデンスでは、なぜ愛玩動物と子どもは不可とされているのか……事故を防ぐためにせよ、子どもを排除する文言は、やはりなくなっただろうがいいですね。うるさい、落ち着かないと、子どもの存在を嫌悪する傾向は社会的にも問題です。ジェノサイドだって、最初は嫌悪から始まりますから」

藝大音楽学部を首席で卒業、同大学院を修了し、昨年開かれた第17回チャイコフスキー国際コンクールではセミアイナリストから選出されるピアノ部門ベストコンテスタント賞を受賞した黒岩航紀さん。妻の伊藤優里さんも藝大大学院修了生で、大学院時に留学したりヨン地方音楽院では1等賞をもって卒業。第35回日本管打楽器コンクールフルート部門第1位に輝くなど多くの受賞歴をもつフルート奏者だ。

2人は藝大生部のころに先輩・後輩として出会った。「もともとは顔見知りぐらいの関係だったんですが、僕が室内楽の演奏会を主宰していて、そこでぜひ一緒に共演してほしいと声をかけたのがきっかけでした」と、黒岩さんは言う。

その後、交際がスタートしたものの、黒岩さんは1カ月後に1年間のハンガリー留学を控えていた。「最初から遠距離恋愛になることが決まっていた、つらいなと思いました(笑)」と、伊藤さん。しかし順調に乗り越え、黒岩さんが帰国すると2人は結婚。伊藤さん

## 山梨を拠点に家族と暮らし 自分たちらしい音楽を探求する ピアニスト&フルーティスト

### 黒岩航紀 伊藤優里

が大学院に在籍する最後の年のことだった。「コンクールで入賞したり1位をとったりしたこと、演奏会にお声かけいただく機会も増えて軌道に乗り始めたときだったので、今後どうなるかなと多少の不安はありました。でも、妊娠したことが何よりもうれしくて。音楽活動ができなくなるかもしれないというよりも、いつかは再開できるという前向きな気持ちのほうが強かったですね(伊藤さん)

現在、黒岩さん一家は、伊藤さんが生まれ育った山梨県甲府市で長女の茉凜ちゃん(4歳)と3人暮らし。コンサートは都心で開かれることも多く、大学で受けている指導の仕事などもあり、黒岩さんの音楽活動の主なフィールドは東京にある。だが、甲府に引

越すことを決めたのは、伊藤さんの実家が近く、彼女も茉凜ちゃんも安心して暮らせるのではないかという思いからだ。「東京から甲府は電車の移動もそんなに時間がかからないですしね」と、黒岩さんは現在、東京と甲府を行き来する日々を送っている。

「自分はもう本当に音楽バカで、音楽のことが考えられないタイプなんです。だから練習に対してもものすごくストイックで、1日に10時間でも練習したいくらいで……。そのいっぽうで家族と過ごすことも大事にしたい気持ちがあるので、家にいるときは子どもと一緒に遊ぶ時間は大切にしています。だから物理的に練習時間が減ってしまったことに焦りがあったのも事実。でも、結婚して子どもが生まれて、どんな生活をするのが家族みんなにとって幸せなのかを考えたんですよね。どちらかというところ、切り替えないといけないのは僕のほうだったかなと思います(黒岩さん)

甲府に自宅を構えてから、さあ大変な毎日になるぞ……という当初の心配をよそに、黒岩さんはうれしい変化を感じている。以前は、



### 黒岩航紀

くろいわ・こうき / 1992年生まれ。  
東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻を首席卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了後、リスト音楽院（ハンガリー）で研鑽を積む。2023年第17回チャイコフスキー国際コンクールピアノ部門セミファイナリストおよびベストコンテスタント賞など数々の受賞歴をもつ。オーケストラとの共演や、ソロとしても活動。

### 伊藤優里

いとう・ゆり / 1993年生まれ。  
東京藝術大学音楽学部器楽科フルート専攻卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了。第35回日本管打楽器コンクール第1位など入賞・受賞多数。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団との共演や、NHK交響楽団での客演などを行う。写真は、山梨県甲府市にある武田信玄を祭神とする武田神社にて。



ピアノに興味をもち始めた茉凜ちゃんの姿に、「音感がよくて、集中力もある」と微笑む2人。黒岩家では、3人で演奏することも遊びの一つ。

自身のキャリアに関して多くの可能性があるゆえに、どこへ進んでいくべきかなかなか決められずにいたのだという。いまも音楽へのストイックな姿勢はもちろん変わっていないが、自分の方向性が定まってきたのだそう。

いわく、「甲府は自然が豊かで東京よりも時間の流れがゆったりとして感じられます。妻と子どもとのびのびと毎日を過ごすことが、自分の音楽活動にも生きてきているんですね。以前よりもすべてが豊かになったという

実感があります」

今回、家族写真を撮影した武田神社（P23）では、「お参りして行こう」と、本殿の前で家族3人が手を合わせる微笑ましい光景があった。そして一直線に抜ける参道の向こうには山並みが広がり、心が洗われるような景色が続いていた。黒岩さんの言葉にうなずける。

さて、黒岩さんとは対照的に、伊藤さんはもともと短い時間で集中して練習するタイプとのこと。いまは、茉凜ちゃんが幼稚園に通っている間にフルートの練習を済ませ、習い事の送迎や食事の支度をすることが多いという。茉凜ちゃんが赤ちゃんだったころを含めて、これまできつと大変だったこともあるだろう。それでも、「もう、子どもはただただかわいくて仕方がないです。大変だったことなんてあったかな？という感じ。あんまり覚えていないですね」と笑う。虚心坦懐、豪放磊落（らいらく）。そんな言葉が彼女にぴったりの気がした。

「私は、夫の練習に関しては干渉しないんですよ。彼が何か悩んで話したいときには相談に乗ることもあるけれど、特に私からアドバ

イスをするわけではありません。最終的には、『したいようにしたらいいじゃない』って思うから」

「そういえば、夫は料理が得意で、夕食をつくってくれることもあるんですよ」と伊藤さんが言うと、「ピアノニストって手をけがしないように料理をしないイメージがありますよね？ 以前の自分だったら気にしていたかもしれないけれど、いまは家族が喜んでくれるのがいちばん！」と黒岩さん。

そう話していると、もうすぐピアノ教室に通い始めることを楽しみにしているという茉凜ちゃんが、ピアノの椅子に腰掛けて「チューリップ」を弾いてみせてくれた。

決して、音楽の道に進んでほしいという思いがあるわけではないと黒岩さんと伊藤さんは話すが、「いつか家族で共演できたらいいな」と密かに夢を抱いてもいる。大きなコンサートホールじゃなくてもいい。例えば、自宅で演奏会を開いて地元の人々に楽しんでもらう。家族と一緒だからこそ身につくっている、自分たちならではの音楽というものがあるのかもしれない、と。

迷路のような細道を、その人は迷うことなく歩いていく。事務所を構える東京・神楽坂の路地裏は、藝大OBで数多くの住宅建築やリノベーションを手がける齋藤繁一さんにとっては庭のような場所だ。

「もともと隣町の出身でもあるし、アトリエを借りるなら歴史のある場所がいいなと思っていました。おいしいお店もたくさんあるし」

齋藤さんの家族であるパートナーと一人娘は、この街にはいない。ウィークデーは都心に住んで仕事をし、神奈川・茅ヶ崎に暮らす2人のもとへ行くのは、現在は週末のみ。結婚して子どもが誕生してからの17年間、基本的には別居生活を貫いてきた。

「一緒に住んだのは最初の3、4カ月くらい。子どもができたのでとりあえず実家に、となつてから、ずっとそのままです。結婚した当時、すでに4歳を過ぎていて、それまでずっとひとりで暮らしてきたから、もう生活のペースが出来上がっているんですね。彼女も

## 産むこと以外はなんとかなる。 神楽坂～茅ヶ崎を1日2往復！ バレリーナと「遠距離婚」の建築家

### 齋藤繁一

同年代だし、逆に2人で暮らすほうが違和感ありあり（笑）。僕は家事全般まったく困らないし、『じゃあ、一緒にいなくてもよくない？』つてことで」

齋藤さんのパートナーは、ロンドンの名門バレエ学校で学んだバレエダンサー。時期は異なれど、同じくロンドンへの留学経験がある齋藤さんとは、友人を介して出会った。

「一応長男で、親からも『結婚どうするんだ』と言われていたし、子どもをもつならそろそろリミットかなと思っていて」と齋藤さん。

一方、パートナーの実家はバレエ教室で、最初は彼女がレッスンのため茅ヶ崎へ通っていたのが、出産を機に齋藤さんが通う側。こうして、齋藤家の遠距離生活が始まった。

「彼女は自分ファーストではないけど、徹頭

徹頭バレエファーストな人。食生活も生活習慣も、飲み食いが大好きな僕とはまったく違います。僕のほうも、工事が始まればそこへ足繁く通う生活で、生活時間帯も夜型。だから週に何日か、曜日を決めて……娘が赤ちゃんの頃はバレエ教室のスケジュールに、幼稚園や小学校に上がってからは園や学校のスケジュールに合わせて移動していました」

といっても、齋藤さんの子育ての実態はなかなかのもの。パートナーがバレエに打ち込めるよう、掃除に洗濯、娘の身の回りの世話から食事の支度（料理の腕はプロ並みでおせちも自作）、お弁当づくりまでをフォロー。「出産はしていませんが、それ以外の子育てにまつわることはだいたいやってきたと思います」と胸を張るに十分なレベルだ。「娘が年長組のとき、パートナーが少し体調を崩したこともあって、僕が茅ヶ崎に住んで東京に仕事に通ったこともありました。朝、娘を幼稚園に連れて行き、そのまま東京へ行って会議に出て、お迎えの時間に戻って家に連れて帰って、また東京へ……という日も。送りはあっても、迎えに行くお父さんはさす



**齋藤繁一**

さいとう・もいち／東京藝術大学  
美術学部建築科卒業、同大学院美術  
研究科建築専攻修了。英国 AA  
スクール ディプロマコース修了の  
後、2000年にソフトセル建築都市  
環境研究所を設立。グッドデザイ  
ン賞など受賞多数。日本建築学会  
子ども教育事業部会幹事として子  
ども向けワークショップなどにも  
携わる。



愛知県常滑市の《T house》(2021年竣工)は、ダイニングキッチンが主体の贅沢なゲストルーム。それまで料理をしていなかった施主が、この空間を得たことで料理に目覚めたという。写真=浅川敏

がに少なかったですが、女性の友だちは多いほうだし、ママ友付き合いも苦にはなりません。でも電車で1往復3時間を日に2回、ですからね。車内でパソコンを開きながら『俺、何やってんだっけ?』って。あのとさばかりは、さすがに痩せましたねえ』

思い出し、苦笑する齋藤さん。幼い頃、両親から勉強するよう言われたのが嫌だったという齋藤さんは、娘とは「とにかく遊ぶ係」そのぶん、勉強面は毎日厳しいレッスンを繰

り返して成長してきたパートナーがリードを取るなど、凸凹もピツタリ。行き来はハードだったものの、独自のやり方で年月を重ね、お受験などのハードルもクリアしてきた。

「幸い、大きな病気もせず育ってくれたし、向こうの両親と一緒に暮らして、すぐ近くに住む親戚からサポートを受けられたのも大きかったと思います。一緒にいる時間は圧倒的に短いのでコミュニケーションは十分でなかっただろうし、娘にも『なんでいないの?』と言われたこともありましたが、もう最初からそういう家族だったし、一応、それで成立していますから。近すぎると揉めることもあるだろうし、離れているくらいがちょうどよかったんじゃないかと(笑)。でもやっぱり、子どもは面白いですよ。だって、発見することが多いから。僕もともと好奇心が強いので、アクシデントも楽しめるほうなんだと思います。たとえよくないことが起こっても、『これも新しい経験だ』って」

娘の成長を見て感じたこと、家族とともにある時間は、齋藤さんの仕事にも、いくつものヒントをもたらした。

「子ども用の家具をデザインする、なんていうのは、自分のデザインポキャブラーリーにはなかったものだと思います。家の設計やリノベーションを手がけると、やっぱり自信をもって語れるのは、自分の子育ての経験だったりしますよね。どんなに本や論文を読んでも、それが説得材料になるとは限らないけど、体験してきたことには、失敗も含めて間違いがないので……。もし僕が離婚してしまっても、それならそれで、経験をともに離婚しないための家や、逆にスマートに別れられる家を考えるなど、いろいろとフィードバックのしようがあるかもしれないし。フフフ」

なんとかなりますよ、と齋藤さん。軽やかな言葉も、経験に基づく真実なのだろう。「計画を立てても思い通りにならないことだらけだし、先のことを考えていると心配しかない。でも、たとえ問題が起きたとしても、まったく解決がつかなかったという事はなかったし、そのときなりに力になってくれる人が現れたり、ポイントポイントで運が向いてくることもあって……。子育てって、そういうものなんだと思いますよ」

# PART 1

美術学部工芸科鍛金専攻

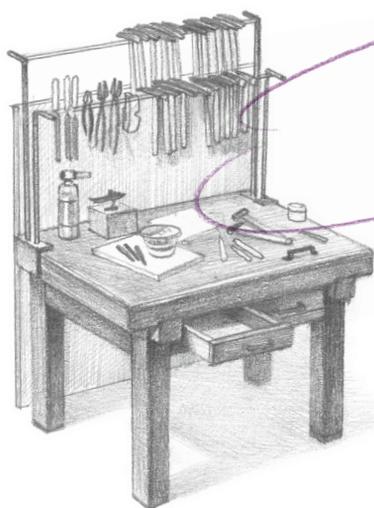
金属の硬さに負けない！  
強い意志と  
イメージする心を

薄く、軽く、美しく



鍛冶師だった祖父の仕事場で鍛金に触れた丸山教授。金属の張りて人体の躍動を表現する人物像を数々制作。

「叩」という字は、人が地面にひれ伏し額かぶすく姿を模かたどったものである——というような字源語源系から始めると、それって書きあぐねたときの常套手段でしょと邪推されるが、否！ 叩くって、何かこう、神聖な感じがするじゃないですか。人類の行為のなかでおそらくもとも原始的な行為が、進化を遂げた今も芸術活動に結びついている……今回はその崇高さに敬意を払いつつ、叩く、すなわち「打つ」という側面から創造、表現活動にアプローチしようという試みなのであります。



## 授業 SANKAN

熱いうちに打て！ 編  
美術学部工芸科鍛金専攻＋  
音楽学部器楽科管打楽専攻打楽器

シャープな鋼の美も、心震わすリズムも、すべてはこの手がつくり出す。  
打って、鍛えて、明日を拓く。  
美術・音楽の「叩く」現場をノックしました。  
挿絵＝小柳景義 文＝大谷道子



細くしなやかな金属素材で自在な鍛造を行う志村准教授。金属に魅了されたのは、やはり少年時代の体験から。

さて、美術学部で「叩く」といえば、まず思い浮かぶのが「鍛金」。金を鍛えると書く字の通り、銅や鉄、金、銀などの金属を叩いて延ばして造形する鍛金は、世界四大文明の時代に遡るほどの古い歴史をもつ技法。日本では技術伝来後、戦国時代に武器や甲冑の製造で発達し、のちに美術品や日用品へも広まったが、ここ藝大においても、美術学部の前身である東京美術学校開校時から教室が設置され、多くの作家が輩出してきた。

その工房の扉を開けると……トンテンカンテンと小気味いい音（やや大きめ）が響く、ザ・鍛冶場の様相。取材時は年明け早々だったが、しばしも休まず槌打つ響き……の童謡（昭和世代限定？）通り、鍛冶場といえば、昔も今も勤勉の象徴だ。「いまは卒業・修了制作の大詰め。その他の学生も、年度末の講評会に向けて詰めの作業を行っています」と話すのは、工芸科教授の丸山智巳教授。同科の志村和彦准教授とともに、まずは鍛金専攻

# 鍛金



丹念に研ぐことで模様が変化する木目金。古くは刀の鐔の装飾などにも、その美しい紋様が使われてきた。

での学びについてレクチャーしてくださいました。  
藝大工芸科で金属を扱うのは、工具を用いて金属を彫り装飾品などを制作する「彫金」、溶かした金属を鑄型いぐたに入れて造形する「鑄金ちゆうきん」、そして鍛金の3つ。学部2年から専攻に分かれ、鍛金専攻では、修士課程を含め20人あまりの学生が工房を共有し、制作を行っている。  
「学ぶのは、大きく分けて『絞り』と『鍛造』。絞りには金属の板を金槌で叩いて延ばし造形する手法で、金属の表面積と厚みのコントロールドが大事になります。『鍛造』は、いわゆる『鉄は熱いう



火器や重機、薬品を扱う現場ゆえ、作業時の服装には要注意。手袋は機械に引き込まれるのでかえって危険。

ちに打て』ですね。熱した金属を叩いて、自由に形をつくっていきます」(丸山教授)

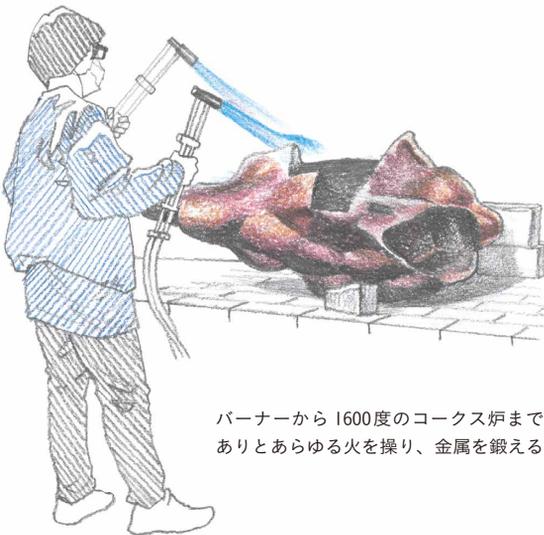
なんでも、携帯やスマホが小さく軽くなったのは、日本の職人の「へら絞り」(絞りの一種で、回転する金属板に金属製のへらを押し当て成型する加工技術)によるものだとか。ちなみに、現在世界最大の鍛金作品といわれるのは、あのニューヨークのシンボル・自由の女神像(鉄骨の骨組みに加工した銅板を張ってつくられている)だそうです。「不可能なものもあるにはありますが、大抵のものはつくれますね」と丸山教授は胸を張る。

## 金棒はある。鬼はどこだ？

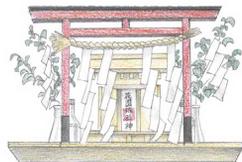
そして、大きなものも繊細なものも、表現は「まず道具づくりから始まる」と両先生。え、トンカチだけじゃダメなんですか？と尋ねると、先生方が指差した先には、大きなものから小さなもの

の、細く短いものから太くて長いものまで、多種多様な金槌がずらりと並んでいた。

「重さやR(湾曲)の度合いが違ったり、表面が滑らかだったりザラザラしていたり。似ているようで全部、微妙に違うんですよ。私はざっと40〜50本持っていますが、丸山先生はもっとかな。絞りに使う当て金かたご(さまざまな曲面をもった鉄の塊)や金床かんとこ(打つときに作品を据える鑄物の台)など、作品によって必要な道具は都度つくります。仲間同士でも『ちよっと貸してよ』はなし(笑)。道具をそろえて、打ち方を覚えて……そういうと



バーナーから1600度のコークス炉までありとあらゆる火を操り、金属を鍛える。



工房の一隅には神棚が鎮座。  
年に一度の「鑪(ふいご)祭」  
では一同の安全を祈願する。

ころは、スポーツと似ているかも  
しれません(志村准教授)

2年次に絞りで動物の像をつ  
くった学生たちは、その後、多様  
な表現方法と技術を身につけな  
がら自分の表現したいイメージ

をかたちにしていく。つまり「金棒」  
はある。じゃあ「鬼」はなんだ?と、  
丸山教授。工房には、それぞれの内なる  
鬼と格闘する背中があった。

### 納得いくまで、何度でも

バーナーを二本持ちし、筋斗雲のような形のオ  
ブジェに轟々と炎を浴びせているのは、今年卒業  
予定の4年生。赤く灼けた鉄を箸(鉄製。英語で  
は「トング」だが、日本ではやはりこの名)で運  
んで金床に据え、素早く、かつ慎重に叩いていく。  
水場にも学生の一団が。彼らが制作中なのは  
「木目金」の小箱で、複数の金属を鍛接(熱して  
打ち、圧着させる)して木目のような模様を浮き  
立たせる、江戸時代からの技法を用いた作品だ。  
傍らには不思議な液体がブクブクと沸いて  
おり、何やら魔術めいているが、中身は硫酸銅と  
緑青(サビの素)の混合液。この液で煮て、小箱  
の色や模様さらに変化をつけていくのだという。

「物理的に作品をどう組み立てていくか計画する  
のも、大事な能力」と志村准教授。壁際でひととき  
わ大きな作品に取り組む修士2年の学生の作品は、  
一对の巨大な人体像だ。土偶のような神秘的なフ  
ォルムで、浮き出た筋肉や血管を想起させる銅板  
の張りが美しい。わずか1・2ミリの板を叩きに  
叩き、1年をかけてこの大きさままでたどり着いた  
想像力と造形力、そして根気たるや……。途中で  
嫌になったりすることないんでしょうか? 尋ね  
ると、それはねえ、と両先生、顔を見合わせて頷  
きあう。

「金属って、それなりにこちらの意志が固くない  
と、金属の硬さにやられるというか、負けちゃつ  
たりするんですよ。そういうときは、もう一度金



金槌、当て金(左)、金床  
(右)は必須。作品により、  
道具の種類も数も変化する。



松木建人さんの独創的な修了  
制作《BODY・BODY》はこの  
後、無事完成。卒業・修了制  
作展でも異彩を放っていた。

属にお伺いを立てたり、道具のチョイスを見直し  
たり……。でも、やり直しがきくというのが、な  
んといっても金属のメリットですかね。木は削り  
すぎたらおしまいです、僕らはもう一度熱して、  
叩くことができる。それを繰り返すことが、スキ  
ルアップにもつながるので(丸山教授)  
「つくりながらもどうなっていくかわからない、  
頭では理解できないというところが最大の魅力  
なのかな……。だから、めげそうになっても、考え  
て考えて、なんとかやり込む」(志村准教授)  
大事なのは金属に気持ちで負けない! っってこと  
でしょうか。鋼の意志をもって鋼に向かう、現代  
の鍛冶場の熱さ。厳寒の工房にありながら、心身  
ともに温まる取材時間でありました。

演奏を聴き楽譜をチェック。  
藤本教授自身、かつて“お囃子”“騒音”双方を経験。



“お囃子”4人。黙々と叩きながらも、時折交わすアイコンタクトに信頼がにじむ。

## PART 2 音楽学部器楽科管打楽専攻打楽器 音色と居場所 自分でつくる

あれも、これも、どれも打楽器

さてさて、お次は音楽学部。音楽で

打つといえば、それはもう打楽器しかないでしょう！ ということで、器楽科管打楽専攻へ。防音壁に囲まれたスタジオオふうの教室からは、こちらもドンドンドコドコ、音が漏れ聞こえてくる。

分厚いドアの向こうには、6人の学生たちと、取り囲むように配置されたいくつもの打楽器が。

大きい太鼓に小さい太鼓、手持ちの楽器、奥にはオーケストラで使われるティンパニにシンバル、銅鑼、そしてあれは「のど自慢」で鳴らすやつ！

「チューブラーベルと言います。大きい太鼓はコンガ、小さいのはボンゴ。あとはスレイベル（鈴）とクラベス（小型の拍子木のような楽器。中南米由来）、それとマングア肉ね」

いやいやマラカスで

しょ、とツツコミ

を誘うのは打楽器

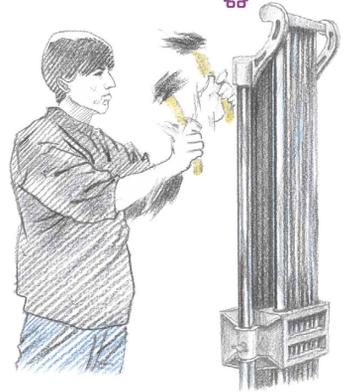


## 打楽器



筋伝いの曲を、若い学生たちが演奏するのだ。トタトタトタトタトタトタトタ……ごく弱いシンプルなりズムで始まったサウンドは、やがて複雑なりズムを伴って徐々に激しく立ち上がってくる。バリ島の民族舞踊音楽を模したエキゾチックな曲は音階こそないものの、呪術的な音圧で聴く者を釘付けにする。鍛金でも感じたことだが、叩く音って人の心身にエネルギーを送り込んでくるんですよ。大小の太鼓を受け持つ

前の4人（先生曰く、お囃子）に



“お囃子”の正確なりズムを揺らすように加わる“騒音”の2人。音の存在感は抜群ゆえ、失敗できない！





「僕は頑張る学生たちにチャチャを入れる係」と藤本教授。5月31日に奏楽堂で開催される演奏会『創造の杜 2024「作曲家ペーテル・エトヴェシュ」』ではソロ演奏を披露。

ティンパニやベル関係を担当する後ろの2人（同「騒音」）が加わって、最後は音とリズムの満艦飾演奏会の幕開きにはうってつけのインパクトあるナンバーだ。

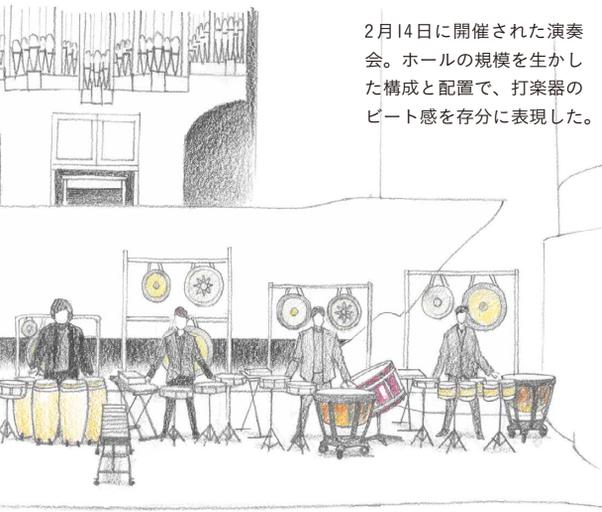
### 打楽器奏者は「総務課」？

終わってから気づいたのだが、驚くべきことに藤本教授もメンバーの誰も「指揮」をしていない。え、え、え、どうやって合わせてるんですか？

「前の4人はずっと16分音符を打っていて、後ろの2人もそれを感じてる。逆に、指揮があると邪魔なんです。皆が目に見えないビートやグルーブを、リハーサルを重ねて共有するんです」

絶対音感ならぬ絶対リズム感みたいなものがあるのか……。演奏会は翌週、曲のフォルムはあらかじめ出来上がっていて、教授は流れを確認しなが

2月14日に開催された演奏会。ホール規模を生かした構成と配置で、打楽器のビート感を十分に表現した。



ら一つ一つの楽器の叩き方、強弱のつけ方などを細かく調整していく。それにしても、これだけ楽器の種類があると、マスターするのも大変なはず。「打楽器の種類、ねえ……数えたことありません（笑）。ただ、太鼓の類は世界中どこでもあるし、シンバル的なもの、マリンバ（木琴）やビブラフォン（鉄琴）のように音階のあるものと、ある程度の種類はあつて。藝大ではスネアドラム（小太鼓）とマリンバ、ティンパニのように、打ち方にテクニクが必要な楽器を教わって、あとはそのときそのときに必要とされる打楽器を、技術を応用してやっていく感じです」

教授曰く、「打楽器奏者は楽団の総務課」。曲に



鎖の塊を握ったり落したり（上）、紙ヤスリを擦り合わせたり（下）と、楽器でない楽器も自在に操る。

よっては通常の楽器に加え、「ジャンパンの栓を抜く音」「機関車が走る音」といったあらゆる音を表現する役が回ってくるという。しかも見ていると、手やスティックで叩くだけでなく、金属の棒やコインで楽器の表面をこすったり、「スパーボール」（おもちゃのスパーボールにピンを刺して持ち手にしたもの）をバチ代わりにしたり、ときには弦楽器の弓手にスイイツと……いやいや、総務課、仕事多すぎませんか？

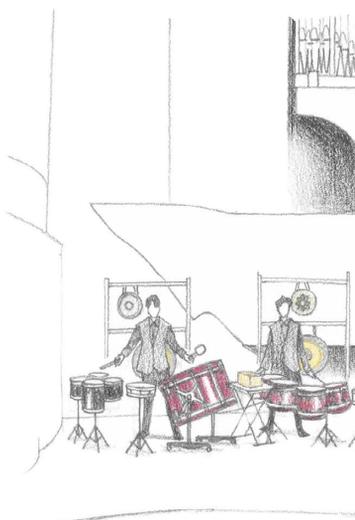
「ハハハ。だから、求められるのは『状況に対応する力』でしょうね。オーケストラで決められた楽器を演奏するだけでなく、前衛的な現代音楽のようにテンポがあるんだかないんだかわからない曲もあるから、リズム感云々だけでは対応できない。『ここは皆で音色をそろえて同じ空気感を醸す』とか、『わざとイレギュラーに音を出す』と

か……いま、ここでどんな音が必要なのか、そのためにどんな道具とテクニックが必要なのかを自分で選択し、判断できる力をつけておくこと」

吹奏楽部出身、マリンバ教室で習った人、ドラムスの経験者と、学生たちの打楽器への入り口はさまざま。毎年、どんなメンバー構成になるかは、入試を終えてみなければわからないと教授は言う。「でも、ルーツがバラバラで、日頃やっていることもバラバラな人間が、こうやって演奏会で集まって、同じ曲に向かって『さあどうしようか?』と。それを考えるのが、面白いんですよ」

その成果は、1週間後の演奏会当日、驚きをも

演奏が乗りに乗れば、ときにはバチやスティックが飛ぶ(!) ことも。アクセントを見越し、予備を用意。



って明らかに変わった。練習で拝見したエキゾチックな『ケチャ』をはじめ、全4曲は激しいものからスタイリッシュなものまでバラエティ豊か。なかには楽器でない道具を交えながら、映画の劇伴のようにストーリーに沿って展開する曲もあった。最後に演奏されたのは、1台のビブラフォンを4人の奏者が取り囲み、それぞれが弦楽器の弓を弾いて音を鳴らすという斬新な1曲。叩くのはまた違った鉄琴の豊かな音色が、天井の高いホルの空間と聴く人の心を満たしていく。

### 置かれた場所で、最良の表現を

打楽器が種類豊富であるように、打楽器奏者の表現活動もまた多彩。藤本教授自身、テレビや劇場での演奏、現代音楽、オーケストラ、ジャズバンドなどさまざまな演奏現場を渡り歩いてきた。まさに『叩き上げ』のパーカッショニストである。「あえて言うなら、何をやってもいいからここで飯を食っていけるようになりなさい、と。指揮者



鉄琴を弓で演奏する『Postludes for Bowed Vibraphone』は米の作曲家エリオット・ゴールの作品。振り上げる腕は舞踊のようで、視覚にも訴える。

や他の人から要求されてやるんじゃないくて、自分がこういう表現をやりたいと思ったときに、選択して実行できる人間でいられるように」

ちなみに、この演奏会にはシンバルや鉄琴に加え、サンダーシート(大きなシート状の金属。叩いたり揺らしたりするとジャワーン!と雷のような音が)といった特異な金属製楽器がいくつも登場した。いつか、鍛金専攻のつくった楽器を管打楽専攻が演奏するコラボ……なんてことが叶いませんかしら? 藝大「叩く」つながりで、ぜひ。

# お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

## 地域中核・特色ある研究大学強化促進事業に 東京藝術大学の構想が採択されました

文部科学省および日本学術振興会が実施する「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」に、東京藝術大学を提案大学とする構想が採択されました。

連携機関である香川大学、東京大学、東京医科歯科大学および東京工業大学との組織的な協力のもと、「アートと科学技術による『心の豊かさ』を根幹としたイノベーション創出と地域に根差した課題解決の広域展開」を推進していきます。科学者とアーティストが協働することで、一人ひとりが暮らしやすいまちづくりや自然（海洋など）の課題を対象に、都心・地方の特性をアートの力で深化させることを通じ、「真にWell-beingで誰もが活躍できる持続可能な世界」を目指していきます。

## TOKYO GEIDAI ARTS FES

## 「世界平和」をテーマにオンラインで開催中！ 東京藝大アートフェス2023

昨年11月29日からオンラインで『東京藝大アートフェス2023』を開催しています。テーマは「世界平和」。藝大生や卒業・修了生に発表の場を提供しアーティストを育成するとともに、A7 (ARTs7) の世界の芸術大学と連携し、地球規模の社会的諸問題についてともに考えることを目的として、株式会社みずほフィナンシャルグループの協賛により実施しています。また、昨年12月13日には受賞作品発表オンラインイベントを行い、学長賞、みずほ賞、優秀賞、佳作の各賞の発表やスペシャル対談をライブ配信し、そのアーカイブも公開中です。ぜひ、



東京藝大アートフェス2023



A7 (ARTs7) について

公開中です。ぜひ、美術、音楽ほか多様な分野のアーティストが一堂に会するアートフェスをご覧ください。

## 上野にアートジャングルが出現!? 藝大アートプラザの『藝大動物園』展

上野キャンパス構内にある、藝大アーティストの作品を展示販売するギャラリー「藝大アートプラザ」では、5月26日まで『藝大動物園』展を開催中。アートによる、アートにしかできない藝大動物園。想像の世界にしか存在しない動物、本物以上にリアルな生き物、生物なのか無生物なのかわからない存在、もしかして人間も？ 藝大アーティストたちがつくりだすアートジャングルをお楽しみください。入場は無料。詳しくは公式HPをご覧ください。

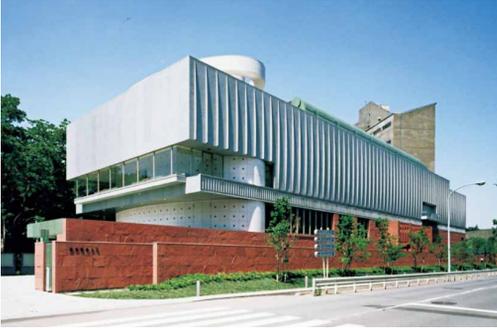


藝大アートプラザ公式HP

## 大学美術館(上野)の 展覧会

### ◎本館

特別展『大吉原展』  
3月26日～5月19日  
黄土水とその時代  
—台湾初の洋風彫刻家と20世紀初頭の東京美術学校  
9月6日～10月20日



大学美術館 本館

### ◎陳列館

敷居を踏む

Step on the Threshold

3月23日～4月7日

デザイン科『invisible space』(仮)

5月23～31日(仮)

GAP『gap』展(仮)

6月7～16日

日本画第二研究室 素描展

6月22日～7月4日

工芸総合演習展2024(仮)

7月12～17日

未来創造継承センター『オープンラボ』(仮)

8月2～11日

染織研究室×精華大学(仮)

8月20～29日

※陳列館1階



陳列館

うるしのかたち展2024

8月20～29日(仮)

※陳列館2階

日本画第一研究室研究発表展

9月3～14日(仮)

## 奏楽堂(上野)の演奏会

同声会新人演奏会

4月20・21日

各14時

各2000円

藝大フィル定期 第421回

4月25日

19時

4000円

シンフォニーオーケ

プロムナードコンサート17

5月9日

19時

一般 2500円

高校生以下 500円

藝大フィル定期 第422回

新卒業生紹介演奏会

5月18日



奏楽堂

15時

3000円

モーニング・コンサート 第1回

5月23日

11時

1500円

創造の杜2024

『作曲家ベーター・エトヴェシュ』

5月31日

19時

3000円

モーニング・コンサート 第2回

6月6日

- 11時  
1500円  
シンフォニーオケ定期 第69回  
(藝大フィル 定期第423回)  
6月6日  
19時  
一般 2500円  
高校生以下 500円  
藝大チェンバーオケ定期 第43回  
6月9日  
15時  
2500円  
モーニング・コンサート 第3回  
6月13日  
11時  
1500円  
モーニング・コンサート 第4回  
6月20日  
11時  
1500円  
モーニング・コンサート 第5回  
6月27日  
11時  
1500円  
藝大第九 チャリティコンサート  
vol.8

- 6月30日  
11時  
5000円  
モーニング・コンサート 第6回  
7月4日  
11時  
1500円  
ウインドオケ定期 第97回  
7月12日  
19時  
一般 2500円  
高校生以下 500円  
モーニング・コンサート 第7回  
7月18日



過去の『藝大第九 チャリティコンサート』より

- 11時  
1500円  
モーニング・コンサート 第8回  
7月25日  
11時  
1500円  
アカンサス音楽祭(邦楽)  
8月24日  
時間未定  
料金未定  
アカンサス音楽祭(オーケストラ)  
8月25日  
時間未定  
料金未定  
モーニング・コンサート 第9回  
8月29日  
11時  
1500円  
モーニング・コンサート 第10回  
9月5日  
11時  
1500円  
ジャズin 藝大 2024  
9月13日  
19時  
5000円

- \*一部の公演を除き、全席指定  
\*展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト(<https://www.geidai.ac.jp/>)をご覧ください。  
\*展覧会についてのお問い合わせ  
東京藝術大学美術館  
☎050-5541-8600  
(ハローダイヤル)  
\*演奏会についてのお問い合わせ  
東京藝術大学演奏芸術センター  
☎050-5525-2300  
\*演奏会チケットの取り扱い  
ヴォートル・チケットセンター  
☎03-53355-1280  
チケットぴあ  
<https://t.pia.jp/>  
東京文化会館チケットサービス  
☎03-5685-0650  
イープラス  
<https://eplus.jp/>  
東京藝術大学生活共同組合(店頭販売のみ)  
☎03-3828-5669

## ○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜り、深謝申し上げます。本号では、2023年10月から2024年1月までに寄附をいただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます（掲載をご承諾された方のみ）。

### [個人の皆様]

植島幹九郎様 100万円	岡本洋子様 1万円	藤代國忠様 1000円	門馬浩様
大島豊広様 50万円	尾崎智之様 1万円	稲塚美代子様	山口由香様
大内潤子様 30万円	及部保雄様 1万円	岩崎真土様	渡邊雅子様
佐橋俊彦様 30万円	工藤善明様 1万円	内田薫様	
西川こずえ様 30万円	久野一恵様 1万円	大川聡様	
奥村康様 10万円	小寺秀仁様 1万円	大野美和様	
木下裕一郎様 10万円	坂入健司様 1万円	岡田尚之様	
城谷匠様 10万円	杉浦俊太郎様 1万円	北川翔一様	
鈴木恵美子様 10万円	杉谷広元様 1万円	京増久夫様	
原田清朗様 10万円	鈴木聡様 1万円	桑村毅様	
藤塚光慶様 10万円	鈴木幸光様 1万円	小林裕之様	
江幡真史様 8万円	世川勇様 1万円	清水晴雄様	
川村陽子様 5万円	高橋亨様 1万円	酒々井夏子様	
菊川政弥様 5万円	高橋慶通様 1万円	世良実奈子様	
駒米三恵子様 5万円	永川澄子様 1万円	高橋和美様	
原田真粧美様 5万円	中村篤様 1万円	趙誠峰様	
丸山美幸様 5万円	福田典子様 1万円	富澤徹様	
秋葉弘実様 4万円	船橋晴雄様 1万円	中島照子様	
柴本美蘭様 4万円	村上徳子様 1万円	西川雅明様	
大西陽子様 3万1400円	吉田正様 1万円	野田量子様	
鈴木俊雄様 3万円	吉田稔様 1万円	廣田和美様	
中谷茂次様 3万円	竹歳勝様 5000円	福島武様	
望月千文様 3万円	竹原隼之様 5000円	藤本洋子様	
大川恵子様 2万円	松山実様 5000円	古谷孝行様	
田所厚一郎様 2万円	森康雄様 5000円	萬造大輔様	
平井和貴様 1万3000円	片桐聡伸様 4000円		
秋山境様 1万円	北岡芽子様 3000円		
伊勢敏哉様 1万円	寺谷あゆ美様 3000円		
磯貝紀枝様 1万円	阪根正明様 2000円		
伊藤公一様 1万円	島野聖章様 2000円		
井上加寿子様 1万円	牛田高様 1000円		
今井菜々美様 1万円	小原健一様 1000円		
上田武夫様 1万円	西谷泰生様 1000円		

### [法人などの皆様]

株式会社平成建設様 300万円  
株式会社IHI様 100万円  
株式会社ジャスト9様

## ○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実施と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

### ☎お問い合わせ

社会連携課渉外企画係 ☎050-5525-2400

藝大基金ウェブサイト <https://fund.geidai.ac.jp/>

### ☎編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京藝術大学内 『藝える』編集部

Fax : 03-5685-7760

E-mail : [toiawase@ml.geidai.ac.jp](mailto:toiawase@ml.geidai.ac.jp)